



いとう たかし  
**伊藤 貴司**さん(34歳) 弥富市稻荷崎

## 先輩たちの背中を目標に

3棟のハウスでトマトの栽培をしている伊藤貴司さん。20歳で就農してから今年で14年目を迎えます。伊藤さんのほ場でトマトの栽培をはじめたのは父の代から。長年、伊藤さんは家の手伝いをしており、小学生のころには農家になることを考えていました。「自分が所属しているあまトマト部会では、近年担い手が減少しており、生産者一人一人が産地を支えていける力をつけていくことが必要になっています」と話す伊藤さん。店頭で手に取ってもらえるものを安定して出荷できるようにすることを目標に、若手のトマト生産者が集まる勉強会で学んだことを積極的に取り入れ、実直に試行錯誤を繰り返す中で自分なりの栽培方法を模索しています。

市場や消費者からの要望に因應するため、今年から導入したのが「かれん」という品種です。実が固いため日もちも良好で、果形も綺麗なことから、秀品率も高く、部会全体でも導入を進めています。「来年からは、高値のつく秋冬の初期出荷に対応できる品種も導入する予定です。導入に際しては、JAや部会だけでなく種苗業者や愛知県の農業改良普及課職員からの協力もあり、毎月ほ場の状態を見てアドバイスをいただいています。品種によって栽培方法や生育は変わってきますが、サポートがあ

るおかげで安心して挑戦ができています」と話します。

また、伊藤さんのほ場では茎から延びる葉をとる「摘葉」の作業を増やして、元々多めに残していた葉を時期に応じて適切な枚数まで減らすようにしました。特に冬の時期は日射量が少ないため、より多くの光が実に当たるようになることで色づきが早くなり、さらに葉に回る分の養分が実に行くようになります。また風通しもよくなり病害虫が減るなど、多くのメリットがあります。

目標に向けて実践を続けている伊藤さんですが、その分作業は増えていきます。そこで昨年から、負担の軽減を目的に、柱へ括り付ける紐をクリップに変更しました。手作業で結びつける作業がなくなり、葉や茎を傷つけないというメリットもあります。しかし導入には、ほ場全体で約1万5千個のクリップが必要になり、コストがかかります。農業経営や栽培だけでなく農場の規模や、市場の需要といった視点も必要になります。部会で学んだことを農場の状況を踏まえながら取り入れていき、経営全体の効率化を目指します。

最後に「先輩の生産者に追いつくのが一番の目標です。安定して出荷できるようにこれからも勉強を続けていきます」と意気込みを語っていただきました。